

本に親しみをもち、読書の幅を広げることができる児童の育成
～児童と本をつなぐ環境の工夫と仲間とかかわり合う活動を通して～

三ツ渚小学校 川添 亜希子

1 主題設定の理由

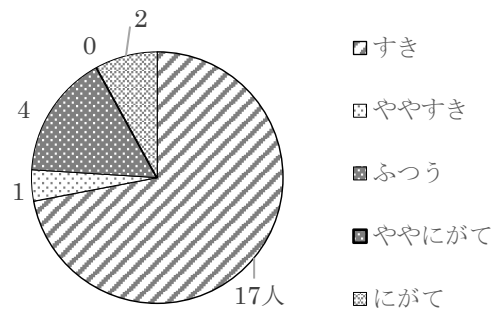
近年、子どもたちを取り巻く環境は大きく変化している。コンピュータやスマートフォンなどの情報機器を用い、手軽に検索して調べることができるだけでなく、動画や電子書籍を見たり読んだりすることができるなど、常に膨大な量の情報とつながることが可能である。ただ、あふれる情報を選択し自分のものにするためには、考え、あらゆる角度から判断する力を身につけるとともに知識も備えていることが必要である。子供達が情報を様々な角度から見つめ、向き合い、取捨選択した上で、学び発見しながら成長できるよう、教師として働きかけていきたいと常々考えている。

本学級の2年生児童は、素直で、1年生のときから本が好きな児童が多い。2年生の1学期に行ったアンケートで、「本を読むことは好きですか。」という質問に対しては、ほとんどの児童が前向きな回答をしている（資料1）。しかし、「休み時間、学校図書館へ本を借りにいきますか。」という質問では、半分以上の児童が借りに行くことがない。また、「図書の本を使って自分から調べたことがありますか。」という質問に対して、ほとんどの児童が「調べない」と回答している（資料2）。

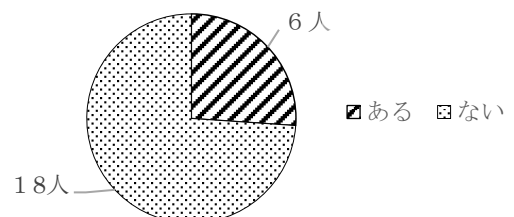
児童の多くは、友達に対して穏やかな態度で接することができる。その反面授業中は分からないことを友達に聞くことができる児童は少ない。困ったことがあった際、そのままにしていることが多く、調べたり聞いたりすることにより解決しようとししない。授業中も友達の話したことにうなずいたり反応したりすることが少なく、グループ活動も一部の児童だけで進んでしまうことが多い。

本校では15分間の朝読書を行っている。この時間はどの児童も静かに集中して読んでいる。しかし、読みたい本が見つけれずに学級文庫の前で長い間本を眺め、立ち尽くしている児童もいる。また、絵本などの同じジャンルの本を常に読み続けている児童

資料1 本を読むことは好きですか
(4月)



資料2 図書の本を使って自分から調べたことがありますか
(4月)



もいる。理由をきくと、「他の本がおもしろいかどうか分からない。」「テレビなどで見たことがある人気の本が好き。」「題名と絵で決めている。」などの声が聞かれた。

学校図書館の運営上の重要な事項についてその望ましいあり方を示す「学校図書館ガイドライン」によると、学校図書館は、「学校教育において欠くことのできない基礎的な設備であり、児童生徒の健全な教養を育成すること」を目的にしている。また、「学校図書館は読書指導の場である「読書センター」としての機能と授業の学習活動を支援する「学習センター」、児童生徒の情報ニーズに対応したり児童生徒の情報の収集・選択・活用能力を育成したりする「情報センター」としても機能を有している」ことが求められている。このため、読書活動だけではなく、学習・情報の面からも「本への関わり方」の基礎を身につけることができるような活動を低学年時から意図的に仕組んでいくことの必要性を感じている。

以上のことを踏まえ、様々なジャンルの本に親しみをもつことができるような環境を工夫することや、仲間とかかわり合いながら読書の幅を広げていく活動を行うことで、子供達の健全な教養を育成し、あふれる情報を選択する力を身につけ、豊かな人間性を養うことができるのではと考え、本主題を設定した。

2 研究主題

本に親しみをもち、読書の幅を広げることができる児童の育成 ～児童と本をつなぐ環境の工夫と仲間とかかわり合う活動を通して～

3 研究の構想

(1) 目ざす児童の姿

本研究では、児童の実態を踏まえ、目ざす児童像を以下のように設定した。

- 本に親しみをもち、自ら進んで本で調べたり考えたりするなど、豊かな読書活動ができる児童
- 仲間とかかわり合いながら、相手のよさに気づき、読書の幅を広げることができる児童

(2) 研究仮説

目ざす児童像にせまるため、以下に示す二つの仮説を立て、それに対する手だてを講じ、抽出児童の変容を追った。

- ① **仮説 1** 児童と本をつなぐための環境や場を整えれば、より本を身近に感じたり本を自主的に活用したりできるだろう。(読書への興味・関心)
- ② **仮説 2** 本について仲間とかかわり合う活動を段階に応じて継続的に進めれば、児童が友達のよさ、本のよさをみとめ合い、その結果、読書の幅を広げていくことができるだろう。(読書範囲の広がり)

(3) 研究仮説に対する具体的な手だて

- ① 仮説 1 に対する手だて 1 「図書館の仕組みや配置を知る機会」の設定

児童が図書館に休み時間に行くことが少なかったり、本を手にとることがなかったりするのには、図書館の仕組みや配置などを知る機会がないのではないかと考えた。本の配置やおもしろそうな本があることを知れば、より本に親しむ態度が芽生えるのではないかと考えた。このため、国語科の授業において、図書館の仕組みや配列について探検したり聞いたりすることを通して、より身近な場所・気軽に足を運べて安心できる場所だと考えることができるような機会を設定する。さらに、学校司書と連携した授業を行うことを通して、児童はより本を身近なものにとらえるのではないかと考えた。

② 仮説 1 に対する手だて 2 「楽しんで読書活動を進められる環境」の設定

児童が、本を楽しみやすいように、教室の掲示を工夫する。本を読み終わったら、児童が進んで活動し、次も取り組みたいと実感できるように、明確に分かる形で表現させる。

③ 仮説 1 に対する手だて 3 「進んで本を使って調べたくなる場」の設定

児童が、本を使って調べたいと思えるように、教室環境を工夫する。日頃から学習内容を見通して、本を使う活動を行う。学校司書に相談し、本を 1 か所に集めるとともに、手に取りやすい場に本を置き、調べ方を教える活動を行う。

④ 仮説 2 に対する手だて 1 「本を通して仲間と継続的にかかわり合う活動」の設定

児童が、自分では選ばないジャンルの本を手にとることができるように、学級活動の時間で本を紹介し合う活動を行う。また、一度きりではなく、学期に数回行うことによって、児童がそれぞれ工夫した紹介活動を行えるようにする。また、グループや学級での活動を重視することによって、仲間とかかわり合うよさを感じることができるようになる。

⑤ 仮説 2 に対する手だて 2 「かかわりが見える環境」の設定

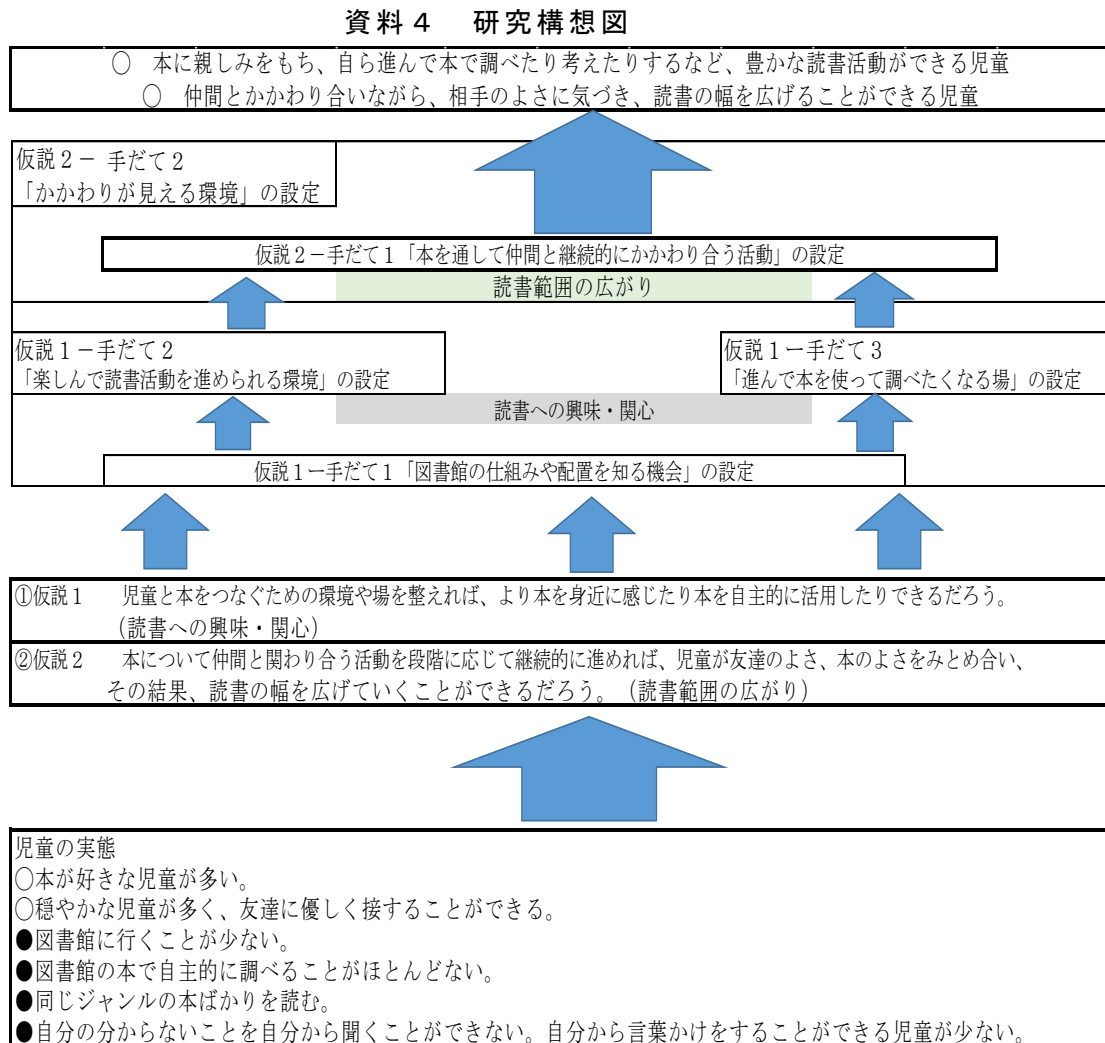
児童が、紹介した本を他の児童が実際に読んだことを視覚的に確認できる場を設定し、仲間にも認められたことを実感することができるようにする。

(4) 仮説の検証方法 (資料 3)

資料 3 仮説を支える手だての有効性の検証方法

	仮説を支える手だて	検証方法
仮説 1	・ 図書館の仕組みや配置を知る機会 ・ 楽しんで読書活動を進められる環境 ・ 進んで本を使って調べたくなる場	・ 授業後のふり返し ・ アンケート調査の変容
仮説 2	・ 本を通して仲間と継続的に関わり合う活動 ・ かかわりが見える環境	・ 授業後のふり返し ・ 発表の様子 ・ アンケート調査の変容

(5) 研究構想図 (資料4)



(6) 抽出児童について

4月のアンケート調査により読書活動に対する意欲や普段の生活の様子から2人の児童を抽出した。

○抽出児童A 本を読むことが苦手(アンケートによる)。朝読書の際、なかなか読みたい本を見つけることができない。いつも同じジャンルの本ばかりを読んでいる。内気で授業中も挙手をして話すことがほとんどない。

○抽出児童B 本を読むことが好き(アンケートによる)。朝読書の際、色々なジャンルの本を手に行っていることが多い。休み時間は外に遊びに行くことが多く、図書館に行くことが少ない。言葉が幼く、とっさに言葉が出てこない。また、文字がすらすらと読めないことを気にしている。

4 研究の実際と考察

(1) 仮説1の実践

①「図書館の仕組みや配置を知る機会」の設定(7月)

国語科「本はともだち ミリーのすてきなぼうし／本の分けかた・ならべかた」

学校の図書館の本の分け方、
並べ方を知り、いろいろな本に
興味をもつことができることをね
らいとし学校司書と連携して授業
実践を行った。

図書館を身近に感じてもらえる
よう学校図書館で授業を行った。
グループを作り、「学校図書館には
どんなひみつがありますか。グル
ープで考えてみましょう。」と問い

かけた。ワークシートを配布し（資料5）、グループで知っている限りのひみつを
書かせた。周りを見回しながら、ひみつを書いている児童が
いる一方、グループの関係がうまくいかずに一人で書き進め
る児童や隠しながら書き進める児童もみられた。「新しくはい
った本がある。」「動物の本がいっぱい並べてある。」「図鑑や
サッカーの本がある」などの意見があり、ジャンルに分けて
おかれていることは、知っているようであった。「パソコンが
ある。」「黒板がおいてある。」などの設備に気がついている児
童もいた。

その後、学校司書から①本の立て方、整とんの仕方、②分
類番号の説明、③絵本・昔話・レオ＝レオニの本・生き物の
本のおいてある場所と紹介④図鑑・ポプラディアの紹介を受
けた。話をする内容については、事前に学校司書と話し合い
を行い、2年生の児童でも分かりやすい内容にすることにし
た。例えば、分類については言葉自体が難しいため、図鑑を
グループに一冊ずつ配布して実際に本の背を見せながら「こ
こにはどんな数字が書いてあるかな？」と問いかけ、その数
字をもとに本の場所を知らせるようお願いした。ラベルの
数字について示したものが資料6である。また、分類番号の
掲示を新しくするとともに、2年生の児童が興味をもちそう
な「野菜の育て方の本」「レオレオニの本」などの掲示をしば
らくの間新たに付けてもらった（資料7）。 分類番号7は本来「芸術」であるが、
「ずこう・たいいく・おんがく・ゲーム」と分かりやすい言葉に書きかえてもら
い、児童の好みそうな「やきゅう」と「サッカー」の本がある場所を下の棚の部分
に独自に貼り付けた。分類番号9の「文学」は「ものがたり・おはなし」と簡単な

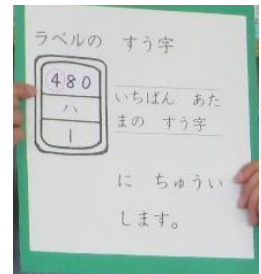
資料5 図書館のひみつワークシート

虫のいかたについて、 かいてある本。	むかしばなし。
ゆまゐについてかいてある本。	レオレオニの本。

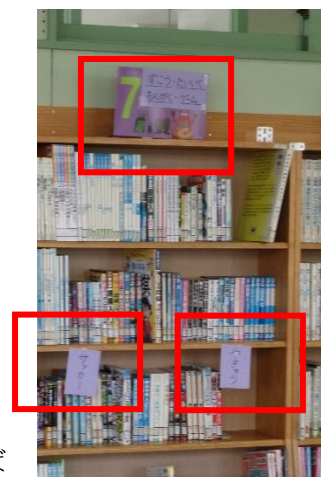
2年生の児童が知っているひみつをここに書いてください。

ひみつは、
 1. 新しくはいった本がある。
 2. 動物の本がいっぱい並べてある。
 3. 図鑑やサッカーの本がある。
 4. パソコンがある。
 5. 黒板がある。

資料6 「ラベルの数字」の説明で使用したもの



資料7 分類番号の掲示例



言葉で示した。そうすることで、児童には分類番号を見れば本を探せるという意識付けができたのではないかと考える。また、ラベルを見て、本を返却する場所も確認できたようである。

学校司書からの説明の後に、「本探偵になって、本を見つけてみよう。」と問いかけ、実際に図書館を見学する時間を設けた。4人グループになって、図書館を歩き回り、いろいろな題名の本を見つけるとともに、ワークシートに記入していくことができた。抽出児童の振り返りが資料8である。

資料8 抽出児童の振り返り（A・B）

児童A たのしかったです。そんなにひみつがあるなんておもわなかったです。 すごいです。よくわかりました。 本がすきになりました。
児童B こんなひみつ、こんなきまりがあったり本のならべるきまりもあったり いろんなきまりがわかったから、つぎからはこうやっていくんだ。 こんなにいろいろな本があるとはおもいませんでした。

児童Aは、ひみつを知って本が好きになったと記述し、児童Bについてはきまりや並べ方について知って驚いた様子が記述されていた。とても前向きな言葉が多くそれまでは、図書館においてある本を知らず、何となく行きづらい場所だと感じていたと後に話していた。また、他の児童の振り返りが資料9である。

資料9 他の児童の振り返り（C・D・E）

児童C とよしつにはいろいろわけて本だなにいているんだなとわかりました。 これからわけてとった本をきめられたところにかえたいです。
児童D いろんなことを一年生でしらなかったことがわかった。いろいろみたことのない本 わからなかった本、知らなかった本がいっぱいあった。
児童E とよしつにどうぶつとかたいいくについてかいてある本とかがあんなにいっぱい あるのは、しらなかったです。レオ＝レオニの本もいっぱいありました。 スイミーもありました。本のおくばしもよくわかりました。

「秘密があるなんて思わなかった。レオ＝レオニの本の場所がわかった。楽しかった。」などの前向きな振り返りが多かった。何より「本が好きになった」と記述した児童が24人中20人、「また図書館に行きたい」と記述した児童が24人中15人にもおよんだ。また、学校司書と連携して授業を行ったことも、いつもとは違う雰囲気では児童にとっては新鮮であったし、図書館について理解がより深くなる手だてにもなった。

以上の結果から図書館の仕組みや場所を知ることから、より身近な場所に感じるとともに「こんな本があるなら行ってみよう。」「以前紹介してくれた本を見に行きたいな。」と図書館に親しみをを感じる児童が増えた。1学期の休み時間には、

友達と進んで図書館へ行き、レオ＝レオニの本を読んでいる児童や、野菜の本を借りて読んでいた児童もいた。

生活科では「みんなでつかうまちのしせつ」という単元で身近な公共施設である図書館を見学する学習がある。本校は市立図書館から遠いため、実際の見学はせず、図書館の仕組みや施設に興味関心をもつとともに、本に親しみをもつことができたように考えられる。

② 「楽しんで読書活動を進めることができる環境」の設定

学級活動 「2の2の読書の木を作ろう」（6月・7月）

本校は6月に梅雨の読書週間が2週間にわたって行われている。教室には学級分館の本だけでなく、市の配本から本を借りて、教室の中であれば自由に読むことができるようにしている。委員会では、学校図書館に進んで足を運んでもらえるような活動を行ったが、教室の本のなかにもおもしろい本がたくさんあるため、教室に掲示することにした（資料10）。読書カードは、読んだ本の題名と感想をもとにおすすめポイントを記入したものである。また、学校図書館で借りた本には桃色、教室にある本で読んだ本には緑色というように色分けをした。書くことで本が苦手にならないように配慮した。

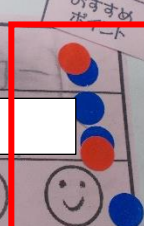
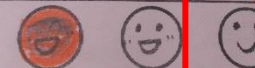
2週間で次々とカードが貼られ、予想よりも短期間で読書の木が完成した（資料11）。「紙が貼れなくなりましたので、シールを使いたい。」という申し出があり、その後、「同じ本を読んだら友達のカードにシールをつけよう。」と話したところ、たくさんのシール（資料10の右部分）をつける児童がいた。また、自分のカードにシールを貼ってもらえた児童もうれしそうにしていた。

全部で198枚の記入があったが、そのうち児童Aは5枚、児童Bは12枚も記入していた。読んだ本を個別に記入する読書記録も取り寄せたが、児童Bの記入はない。しかし、今回の読書の木については、12枚も記入することができたのである。書くことが苦手な児童Aも目に見える形だと楽しく記述して貼ることができていた。このように、児童が視覚的に楽しみながら、読書活動を進めていた。

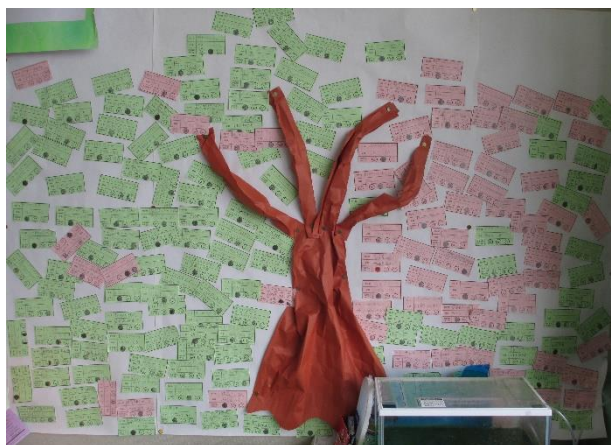
全部で198枚の記入があったが、そのうち児童Aは5枚、児童Bは12枚も記入していた。読んだ本を個別に記入する読書記録も取り寄せたが、児童Bの記入はない。しかし、今回の読書の木については、12枚も記入することができたのである。書くことが苦手な児童Aも目に見える形だと楽しく記述して貼ることができていた。このように、児童が視覚的に楽しみながら、読書活動を進めていた。

③ 「進んで本を使って調べたくなる場」の設定

資料10 読書カードの例

だい名	うまなな 少年サッカ-	
名前		
おすすめポイント		

資料11 「読書の木」掲示物



生活科「生き物なかよし大さくせん」（7月実践）

生活科「うごくうごくわたしのおもちゃ」（10月実践）

本を使って「調べたい」と思える状況を仕組んでいくことが必要と考え、興味をもって取り組める単元で本を利用できる機会を設けた。生活科において、6月に生き物見つけ、7月に生き物について調べる学習をした。図書館によく通っている児童 F は、「教科書にのっている生き物図鑑だけでなく、もっと詳しい本が図書館にあるよ。」と生き物見つけの導入の際に話していた。その後、①生き物についての本がないか学校司書に相談、②期間中に限って、生き物の本を借りる、③調べ活動の時間をとる、という活動を組んだ。児童 F の発言を全体場で広げたため、クラス全体で、本を使って調べたいという思いが高まった。また、調べるときには、「さくいん」というページがあることを知らせ、生き物の名前が分かっていたら、それにもとづいて探すようにさせた。調べる練習もグループで行った。「さくいん」をよく見てあてはまる虫について探すようにさせた。そして、教室に生き物の本コーナーを作り、朝読書だけでなくやその他の時間にも進んで見ることができるようにした。

また、「うごくうごくわたしのおもちゃ」では、最初は教科書のおもちゃを作った。その後、市の配本を利用して動くおもちゃの本を20冊借りることができ、期間限定で本を教室においた。身近に本があって手に取りやすかったため、児童が本を自然と利用できた。

分からない言葉や難しいものに出会った場合にグループならば相談し合い、解決に結びつけていけるのではないかと考え、本で調べる際には、グループ活動で行わせた。児童達は、困ったことや分からないこと、調べたいことがでてくると、本を自然に手に取っていた。グループで課題に取り組ませたことで、本を使うといろいろなことを調べることができると実感することができた。

（2）仮説2の実践

①「本を通して仲間と継続的にかかわり合う活動」の設定

学級活動 ミニミニビブリオバトル（10月・11月・1月）

ビブリオバトルとは、書評合戦のことである。ビブリオバトル公式ルールによると、「3年生以上の児童」を対象にしている。このため、2年生の発達段階に応じて一部変更して行うことにした。

第1時 「ミニミニビブリオバトルを知ろう」（10月26日 図書館にて）

児童は「バトル」という言葉が大好きである。導入として、「今からバトルをします。」という投げかけに対し、目をきらきら輝かせて「おもしろそう。」と話していた。その後教師が一人で3冊の本のよさを話し、一番読みたくなった本に投票させた。そして2年生の児童が取り組みやすく内容を簡単にしたものを提示して（資料12）、実践を行った。

ミニミニビブリオバトル(2年生バージョン)

- ① はっぴょうさんが者がおもしろいと思った本をもって集まる。
- ② じゅん番に一人 3 分い内で本をしょうかい(本当のルールは5分)。
- ③ はっぴょうしゃにしつもんタイム。
 せつめいがたりないときにつづきは?ときくことができる。
 ×からかうような質問 意味のないひはん
 ×自分の意見ばかりいう
- ④ すべてのはっぴょうがおわったあと、どの本が一番よみたくなかったかをきじゅんとしたとうひょうをさんかしゃぜん員1っぴょうでおこない、もっともおおいひょうをチャンプ本とする。

「好きな本を持ってきましたよ。」この問いかけに対し、「本当に何でもよいの?」と問い返しもあったが、図書館ですぐにお気に入りの本を持ってきた。見つけれない児童も数名いたが、「どんな本でもよいよ。」「この前読んでいた本はどう?」などの言葉をかけ、全員本を見つけた。

資料 1 3 授業で使った話し方メモ

本学級の児童は、自分の言葉で話すことに苦手意識がある児童が多い。このため、話型を利用して、話し方メモを作成させることにした(資料 1 3)。まずは、紹介する本の題名を明確にすること、選んだ理由を必

ビブリオバトル 話し方メモ

○しょうかいする本

ぼく・わたしのしょうかいする本は

○その本をえらんだわけ

どうしてかという

名前()

です。

(だ)からです。

ず話すことができるように「～だからです。」という話型にあわせて書かせることにした。好きな本は見つけることができたが、最後まで書ききることができなかった児童もいた。

その後、一人ずつ紹介するようにしたが、どの児童も30秒ほどで時間が終わってしまう。相手の方を見て本を持ち上げることもあるが、大半の児童は、自分の書いた原稿を見ながら話していた。最後にグループで顔を伏せて投票し合い、教師が判定役をした。判定する際には、「自分が表紙や題名だけで最初から読みたいと思っていたものではなく、相手の話を聞いて読みたいと感じたものに手を挙げましょう。」と話した。自分の本がチャンプ本に決まらなかったのに、意外にも悔しがったり怒ったりする児童が全くいなかった。本時の振り返りで、「○○君の本が読んでみたく

なった。」「話し方がとてもよかった。」という相手への気づきの文章が多く見られた。ふだんの授業でも、振り返りを書くことが多いが、ここまで相手のよいところを挙げていたのはとても珍しく感じた。本を通して、仲間とのかかわり合いをもつことで、相手のよさに気がつき、楽しみながら本を紹介し合うことができた。

第2時「工夫して話してみよう」（11月29日 図書館にて）

「次のミニミニビブリオバトルはいつですか。」と尋ねられることが多く、2回目の実践を行った。2回目は1

資料14 児童に示した「話す内容」

回目とは違って、「上級編」と名前をつけて、話し方メモに新たな「話す内容」を提示した（資料14）。

また1回目の際、選んだ本が他の児童からよく読まれていた本が多かったため、2回目はあまり読まれていない自分だけのお気に入りの本を選ぶ児童もいた。

- ①しゅじんこうについて思うこと
- ②本を読んでじぶんが思ったこと
- ③本のページをひらいて見せる
- ④読みきかせをする
- ⑤しゅもん作せん「〇〇について知っていますか。じつはこの本には・・・」
- ⑥あらすじ作せん「〇〇のおはなしです。しゅじんこうの△△は・・・」

グループチャンプ本に選ばれた児童数名が改めてスピーチを行い、クラスチャンプ本を決めた。クラスチャンプ本に選ばれた児童Gのスピーチが資料15である。

児童Gは本が好きで、どんなことでも一生懸命に行う児童である。また、スピーチの時間が他の児童が1分だったのに対し児童Gは2分近く話していたこと、本の内容をよく理解し、資料14の②と③と④を実践しながらおもしろく感じることができるよう話して

資料15 チャンプ本に選ばれたスピーチ

児童G

私の紹介する本は「へんしんおぼけ」という本です。へんしんと書いてあってはんたい言葉になって私はおもしろいと思いました。

どうくつの穴があって、入った人はおぼけになっちゃうから私は怖いです。わたしが怖いのはこのページのたいほうとかいてあって、そこを通り抜けると・・・（しばらく 読み聞かせを行う）

とてもおもしろい本なので読んでみてください。

いたことが聞き手に伝わったと考えられる。

児童Aの振り返りが資料16である。

児童Aは人前で話すことが苦手である。しかしながら、1回目と2回目とで、内容が増えるなど、自分なりに工夫してスピーチを行っていた。また、グループで行うミニミニビブリオバトルはとても楽しく感じていることが分かる。

資料 1 6 児童 A のスピーチと振り返りの変化（①は 1 0 月、②は 1 1 月実施）

スピーチ

①私の紹介する本は「スイミー」です。なぜかというくらげがきれいだからです。

②私の紹介する本は、「みえるとかみえないとか」です。なぜかといういろいろな星があるからです。おもしろい宇宙人もできます。空をとべる宇宙人や体がやわらかい宇宙人や目が 3 こある宇宙人がいるからです。これで終わります。

振り返り

①ビブリオバトルでみんなのはなしをきいていろんな本があるんだなとわかりました。

②いろいろな本があったのしかったです。みんなでやれてよかったです。また、ビブリオバトルをしたいです。

第 3 時 「友達のよいところを取り入れて話してみよう」（1 月 1 6 日 図書館にて）

前回の 1 1 月のチャンプ本に選ばれた児童 G の話し方のよさを確認した。このときに伝えたのが、「内容」と「話し方」である。内容については第 2 時に提示した方法を一つずつ確認した。

「あらすじの書き方は国語で学習したよね。」と話すとき、思い出すように学習した物語の名前が出てきた。話し方については、「相手を見て話す・大きな声で話す」とよく伝わると話した。

グループでミニミニビブリオバトルを行ったとき、明らかにそれぞれの児童の聴き方が大きく変化していた。第 1 時のときには、遠い

距離で何となく聴いている様子だったのが、本や話し手の方を向いて身を乗り出すように話を聴くようになった（資料 1 7）。また、発表者も自分の話す内容を工夫するとともに、どんな発表の仕

方をするのかをワークシートにまとめることができていた。第 2 時と同様、チャンプ本に選ばれた児童が学級で話す機会を設けた。第 1 時は好きな理由しか述べていなかったある児童が、今回は図鑑を用意し、クイズを行う工夫をしていた。その他にも明らかに内容や話し方や変化した児童が多く見られた。児童 B がグループチャンプ本に決まり、学級のビブリオバトルでスピーチした。児童 B のスピーチを資料

資料 1 7 1 1 月のビブリオバトルの様子



資料 1 8 児童 B のスピーチ

ぼくの紹介する本は「すごいね！みんなの通学路」です。この本のこのページを見てください。学校に行くために 2 本のワイヤーだけの通学路もあります。

（ページを見せる）はしごを使う通学路もあります。

（ページを見せる）橋が川につかってはじしか通れない所もあります。（ページを見せる）こんな通学路もあります。とてもあぶない通学路でもみんなが登校していて、自分にはなくて、すごいなと思いました。

18にあげる。今回は児童Bの選んだ本がクラスのチャンプ本に選ばれたのである。また、児童Bについて書かれた振り返りが資料19である。児童Bは話し

資料19 他の児童の振り返り

Bくんの「すごいね！みんなの通がくろ」の読み方がすごくて時間いっぱい話していたのがいいと思いました。わたしもBくんみたいになりたいです。

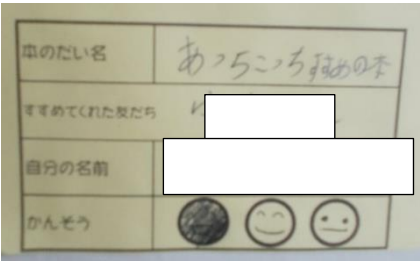
方につたないところがあるが、ページを開きながら、気持ちをこめて読んだり自分の思いを伝えたりしていた。そこが学級の児童によく伝わったのだと考える。自分の書いた原稿をそのまま読むのではなく、学級に伝えたいという強い思いを感じた。顔を見ながら生き生きと話すことが、児童一人一人の心に響くとともに、この本を読みたいと感じさせるのではないかと考えられる。

② 「かわかりが見える環境」の設定

学級活動 ビブリオバトルのおすすめの本を読んで読書の木を作ろう（2月）

それぞれの児童が勧めた本を視覚的に全体の場で共有できるようにするために、3学期に読書の木を再び作成した。今回のカードには、資料20のように勧めてくれた友達の名前を書くようにさせた。色分けをし、緑色のカードには、調べ物をしたときに使用した本、黄色にはその他の本について書いた。目に見える掲示物のため、1学期と同様、進んでカ

資料20 読書カードの例



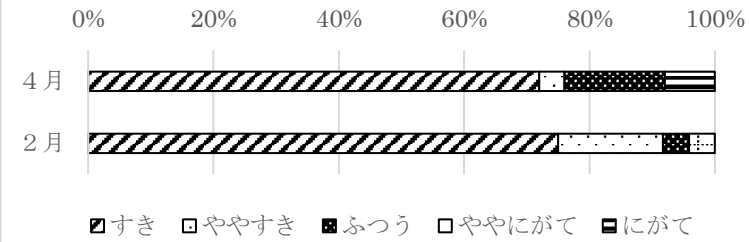
ードを作成する児童が多かった。ビブリオバトルの時のチャンプ本を読んだ児童が5名、他の友達がビブリオバトルの時に紹介していた本を読んだ児童が30名分もあり、普段は自分が選ばない本を読みたいという思いが芽生えたと考える。また、2月に行ったアンケートの結果によると、委員会活動の植物クイズが出題された際、図書館で友達と図鑑で調べに行ったという児童が5人いた。たくさんの児童が読書の木を作ることを通して、読書の幅を広げることができた。

5 研究の成果と課題

仮説1の手だてに関して

4月と2月のアンケート結果（資料21）によると、本を読むことが好きだと感じる児童で、「すき」の児童には変わりがなかったが、「にがて」と考えていた児童Aは「すき」になった。

資料21 本を読むことは好きですか（4月・2月）



また、図書館の本の場所や仕組みが分かったと答えた児童の数も増えた（資料22）。

図書館に行く児童は微増にとどまった。身近な場所に本を配置したことで、図書館へわざわざ行かなくてもよいと考える児童がいたことが要因にあげられる。本が好きだと感じる児童や自

主的に図書館へ行って、様々なことについて本を使って調べる児童は増加した。本を身近に感じたり、自主的に調べたりすることができる児童が増えたと考えられる。

仮説 2 に対する手だてに関して

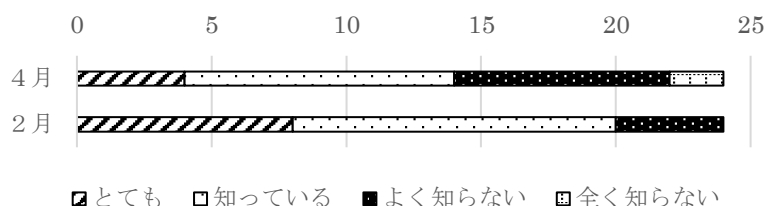
普段自分が選ばないジャンルの本を手にとることができるように、学級活動の時間を通してビブリオバトルを行った。資料 2 3 によると、ビブリオバトルを楽しくないと感じている児童は一人もいなかった。また、一度きりでなく、学期に数回行うことによって、児童がそれぞれ工夫した内容で、温かい人間関係の下、仲間とかかわり合うよさを感じながら活動できた。資料 2 4 によるとグループで話すことが好きになったと答える児童が半数以上になり、話すことへのためらいも少なくなった。そして、ビブリオバトルを生かして、紹介された本を読み、様々なジャンルの本を手にとる児童も増えた。

以上のことから、読書が好きになる児童が増え苦手な児童がいなくなった。自主的に考え、調べることができる児童が増えた。また、友達とのかかわり合いの中で、よりよい人間関係を構築することができるとともに、様々なジャンルの本を手にとる児童が増えた。

今後の課題としては、本に親しむ活動をひとクラスだけで 1 年間行うのではなく、学校全体を通じて活動し、小学校生活全体を見通した学校図書館指導のありかたを模索する必要があると考える。

1 冊の本とじっくり向き合うことは大切なことである。しかし、「自分では読もうとも思わなかった本を読んでもいたらとてもおもしろかった。」「違う本も手に取ってみたい。」「調べることがとても楽しい」と様々な視野を広げることはさらに重要である。本に親しみをもつことが、「豊かな人間性」を養うことにつながっていくのではないかと考えている。

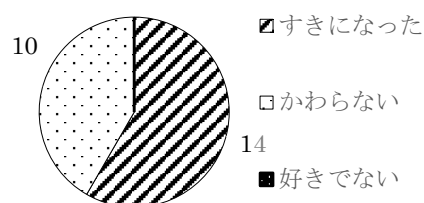
資料 2 2 図書館の本の場所を知っていますか。
(4 月・2 月)



資料 2 3 ビブリオバトル
は楽しかったですか
(2 月)



資料 2 4 グループで話す
ことは好きになりましたか
(2 月)



参考文献

- ・ 小学校学習指導要領 解説 国語
- ・ 文部科学省「これからの学校図書館の活用の在り方等について」
- ・ ビブリオバトルを楽しもう ゲームで広がる読書の輪

谷口忠大【監修】粕谷克美【文】 2014

- ・ 知的書評合戦 ビブリオバトル 公式ウェブサイト